IMAJ ニュース NO.51

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　昭和63年 1月15日
発　行　所　(社)国際MRA日本協会
頒　　価　1部 200円

INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN 〒113 東京都文京区千駄木4-13-4 TEL.03-821-3737(代)

Heart to heart exchange beyond boundaries

日本人の道徳心　李恒寧　3P
海外鉄道技術協力の体験から　瀧山養　5P
「道義革命」に国際的支援を　ダンテ・カルマ　7P
シン枢機卿、MRAを語る　10P
第十回 MRA関西秋季大会　11P
中国レポート「有縁千里来相会」　寒河江亮　12P
写真で見るMRAの歴史⑤　16P

特集

第11回MRA国際会議

「心の国際交流」

今回で第十一回目となるMRA国際会議が「心の国際交流」のテーマのもと、去る十月二十四日から三十一日にかけて、小田原や東京等で開催された。

経済の国際化が益々進行する中で、お互いの国や文化に対する理解不足から生じる様々なあつれきも増しており、文化の、そして特に心の国際交流こそ、今、まさに必要との認識のもと、MRAならではの本音の話し合いが、サラリーマン、教育者から主婦、学生に到るまで、様々な人々を交えて行われた。また、相手の立場に立った援助、自立を妨げない援助とはどうあるべきか、そして、発展途上国から逆に学ぶべき点は何かということについても話し合いが行われた。

一、小田原会議

十月二十四日から二十五日と二日間にわたって小田原アジアセンターで開かれた会議には、インド、フィリピン、韓国、そして台湾からの代表十七名を初め、留学生や在日外国人をも含め、九十名以上が参加した。

小田原市の和田助役の歓迎の挨拶で始まった一日目の会議は、サブテーマの一つである「援助を考える—

物の援助、心の援助」が取り上げられた。長年にわたって海外への鉄道技術援助にあたってこられた瀧山養氏からは、援助に際して謙虚な姿勢を保つことの大切さが、又、インドのミナ・ドシさんからは、今までは一方的に援助を受ける立場と考えていたが、物質的にではなく、精神的に先進国を助けられることがあることに初めて気が付いたとの話しがあった。フィリピンのダンテ・カルマ氏からは、貧しさのために自国の人々が海外に出稼ぎに行かざるを得ない現状を憂い、その状況を変えたいといかに願っているか、また、マスコミの報道だけではうかがい知ることのできないフィリピンの現況について語ってもらった。

筑波大学の留学生会会長を最近まで務めていた台湾の蘇建源氏は、円高下での留学生達の苦境を紹介すると同時に、留学生達にももっと積極的に日本人の輪に加わる努力をするよう奨励していると述べた。また日中友好運動に力を尽くされている榊たか子氏は、代償を求めず感謝の気持を持つことを原則に、中国からの研修生等の世話に当っている中で、愛情を持って叱るという厳しい指導にかえって研修生から感謝を受けたという体験を語った。

全体会議に引き続いて分科会が開かれ、さらに意見交換が続けられた。夕食後には文化の夕べが催され、各国の代表の素晴らしい歌が次々と披露される中、参加者の気持が一つに溶け合い、まさに世界家族という雰囲気に包まれた。

二日目は第二回目の分科会に続き、「心の国際交流」のメインテーマのもと、最後の全体会議が開かれた。韓国のチョン・ジュン先生からは今年のオリンピックの期間中にソウルでの開催が予定されているMRA国際会議の案内状が配られ、参加の要請がなされた。

また、和田アドリエンヌさんからは、平凡な主婦の自分に出来ることとして、アジア諸国から日本に来て苦労している人々が、日本の人々と心の通いあう交流の出来る場として自分の家庭をもっと開放していきたいとの話があった。また、八十歳を過ぎられても尚、命のある限り、世界平和のために尽くしたいと、毎年各国を回られているという元建設大臣の野田卯一氏の話も印象的であった。

各分科会等での率直な話し合いを通じ、心の国際化を図るために何が必要か、どこから始めればよいかということが[illegible]に明らかにされていった。国際交流と言えば、とかく自分には関係無いもの、特殊な人の係わるものととられがちだが、国際的な相互依存関係が益々強くなり、もはや一国のみで世界から孤立して生きていけない現実の中では、国際交流がアクセサリーのようなものどころではなく、まさに国の生存のための安全保障の一環であると認識されるべきであろう。同時に、増えゆく留学生や難民との交流を初め、私達の身の回りで出来ることから一つづつ始める必要がある。まさにMRAの創始者、フランク・ブックマン博士の「一国の最も確かな防衛は隣国の信頼と感謝を受けることにある」との言葉の重みが益々感じられる会議となった。

二、様々な交流

小田原会議の終わった夜、海外代表は小田原JC（青年会議所）主催による交流会に臨んだ。韓国の李恒寧先生が、新しい日韓関係を作るため双方の良い点に眼を向けていこうと率直に提言されたのを初め、意見交換や懇談が行われた。終了後、海外代表はそれぞれ、JCメンバーの家庭にホームステイするという貴重な体験を得た。

箱根・小田原の見学を終えた海外代表の多くは、東京等でホームステイをしながら、各界の人々と交流を重ねていった。

公式行事の最後となった三十一日の東京集会では、チベット文化研究所のペマ・ギャルポ所長が、チベットの現況に触れると共に、色々な分野そして国の人が心を開いて話し合える場を与えてくれると、MRAのユニークさについて評価された。また、台湾のダニエル・リュー博士は、これまで十一年間にわたって、日本がこのMRA国際会議を毎年開催し、台湾を初め多くのアジアの青年達に研修の機会を与えてくれたことに感謝したいと述べると共に、アジアの各国で順番にこのような会議を開こうと提案された。

●小人数で率直な意見交換のなされた分科会（右からインドのミナ・ドシさん、1人おいてサンギ・マヤさん、フィリピンのダンテ・カルマ氏）

日本人の道徳心

李　恒寧

元文教部次官　弘益大学元総長

この度小田原市で開かれた第十一回MRA国際会議に参加して、皆様と心の国際交流が出来たことを喜んでいます。小田原といえば、小田原評定という言葉を思い出します。この言葉は、議論がなかなかまとまらない時に使われる言葉だと記憶していますが、この度小田原に来てみると、アジア各国の人々がここに集い、お互いが心をうちあけ一つの心に議論がまとめられる事を見ることが出来ました。これからは小田原評定という言葉は、よく議論がまとまるという意義に転化するかも知れません。

道徳主義の必要性

MRA運動は道徳政治の事だと思います。今世界には相対立する二つの大きなイデオロギーがありますが、一つは民主主義(Democracy)、一つは共産主義(Communism)です。民主主義と共産主義は政治的な思想ですが、世界には政治的な思想の基礎に宗教的な思想があります。今世界の三大宗教といえば、回教、仏教、キリスト教ですが、回教ではアラー(Allah)を唯一神と仰ぎ、仏教ではブッダ(Buddah)を信じ、キリスト教ではキリスト(Christ)を救世主として信じているから、これらの三宗教はいわばA(Allah)、B(Buddah)、C(Christ)の宗教ということが出来ます。これらの三宗教は各々その特色を持っていますから一つの宗教を以って世界を統一するのではなく各宗教が仲良く共存する事によって世界平和が保たれるべきでしょう。

今日共産主義と民主主義の対立が激しくなっていますが、民主主義は多数の人民の意思を尊重する政治的な体制であり、共産主義は私有財産を廃して共同財産制をとる経済的な制度です。然し人類の社会生活は政治生活や経済生活がその全部ではなく、政治と経済の基礎に道徳が必要で、政治も経済も道徳的基礎がなければ人間らしい生活を営むことが出来ません。今日宗教的にABCという三つの思想があるとすれば、社会的にはCDEの三つの思想があるのではないかと思います。共産主義のC(Communism)と民主主義のD(Democracy)の基礎には道徳(Moral或いはEthic)が必要ですが、その道徳を目標とする政治体制を道徳主義(Ethicracy)と呼ぶことが出来るとすれば、世界はCDEの三つのイデオロギーによって初めて平和が保たれると思います。そのCDEの三角イデオロギーの中心となるものがMRA運動と考えています。

良心は人類共通の善悪を知る心

人類は今、世界平和のために色々な政治共同体、経済共同体を組織しているにも拘らず、世界平和はまだ実現していません。政治共同体を維持するものは力であり、経済共同体を維持するのは金ですが、力や金では人類の平和は望めません。人間の良心と神の声に基づく道徳共同体が生まれてこそ人類の平和と幸福が保障されると思います。人間の良心と神の声とは即ち絶対正直であり、絶対純潔であり、絶対無私であり、絶対愛です。この道徳の四大標準により統合された道徳共同体が出来た時に初めて人類は人間らしく幸福に暮らせると思います。私はABCにならんでCDEの世界が到来すると思っています。

道徳の中心は良心であり、神であると思います。東洋人は主に心の中を深く反省して良心の存在を認め、西洋人は主に宇宙の真理を極めて神の存在を認めるようになりました。良心は主観化された神であり、神は客観化された良心です。良心は孟子の言葉ですが、王陽明は良心を良知と言われました。良心の英語のCon-

scienceに似ています。Con-scienceは共知と訳すことが出来ます。結局、良心は人類に共通した善悪を知る心です。この良心は決して一方的でなく、相互共通的ですから良心に従うということはお互いが心を一つにする事なのです。

新しい韓日関係を目差して

この度私は特に韓日関係について皆様の議論を聞きました。今までは日本人も韓国人も一方的な物の見方でいわば黒白論理でした。お互いが自分だけ正しく相手は悪いという見方でしたが、今度私は日本人が韓国人に対してその罪を自覚し深く懺悔するのを見ましたが、それに対して韓国人の方からも韓国人の過ちを是認するのを見ました。お互い誰が正しいかを主張する代わりに、何が悪かったかを反省して謙虚に心を開きました。日本人はかつて政治大国で今は経済大国になりました。政治大国になって残った名前は侵略者という悪口でしたし、経済大国になって言われているのは経済的動物という汚名です。日本のMRAの方達は日本をして道徳大国にならしめ、日本人がその道徳的行動を以って隣国から恩人として尊敬されるようになる事を念願しているのを見て、私はかつて私が尊敬していた安岡正篤先生が道業を力説されたことを思い出します。道業とは道徳的事業の意味でMRAと同じ精神だと思っています。この度私が日本に来て感心したのは、高層ビルでもなく先端技術でもなく経済的余裕でもなく政治的安定でもなく日本人の心の中によみがえる道徳心の自覚でした。日本人の将来に光栄あることをお祈り申し上げます。

●韓国からは84才の黄温順先生（右から3人目）を初め6名が参加した。

韓国MRA世界大会(ソウル)参加ツアーのご案内

●韓国MRAの青年達によるコーラスグループ、「シングアウト」の公演より

テーマ
「良心に支配された世界の創造」

■期間：1988年9月22日~28日
■会場：韓国精神文化研究院

●参加費用・プログラム等の詳細は次号のIMAJニュース誌上でお知らせします。ツアー参加募集も次号から開始する予定ですのでいましばらくお待ち下さい。お問い合わせは事務局へどうぞ。

海外鉄道技術協力の体験から

瀧山　養

元国鉄技師長　元海外鉄道技術協力協会理事長

昭和四●年に久しぶりに韓国を訪れた際、ソウルの戦前との余りの変わりように驚きました。旧総督府の威圧的な建物の前に韓国古風の建物が建ち、その前に甲冑姿の銅像がそびえていました。それは豊臣秀吉の朝鮮出兵の折、日本の水軍を撃破した韓国の水軍の将、李舜臣の銅像で、愛国の英雄として国民の尊敬の的だということです。又、加藤という名前の人を同伴したことがありましたが、加藤清正の子孫ではないと釈明しなければなりませんでした。それほどまでに過去の日本の行為が韓国人の心を傷つけているのです。日本人は簡単に過去を忘れますが、韓国人は決して過去を忘れません。韓国人は日本のことをよく知っていますが、日本人は欧米の方を向いていて、お隣の韓国に対する関心が薄いのです。こうしたことが両国の関係をギスギスしたものにしている原因と考えます。

残念ながら日本人は韓国や韓国人に関するネガティブなニュースに接することが多いのですが、良い面にももっと目を向けたいものです。私の中学の友人櫂熙昌君は関東大震災の折、半島人が迫害を受けているのに身の危険も顧みず、わざわざ拙宅まで見舞いに来てくれました。韓国を代表する技術者安京模●は旧朝鮮総督府鉄道局に奉職した方ですが、日本の理解者で私とは三十年来の付き合いで、日韓の協力に骨折ってくれました。

韓国の新幹線計画

ソウル―釜山間には新幹線の計画がありますが、新幹線建設となると決まって日本とフランスの競争となるのです。その計画がスタートした当時の日韓関係は、金大中事件の影響が尾を引いていたことやオリンピック誘致合戦の対立、円借款問題、教科書記述問題などでこじれ切っていました。一方、オリンピック誘致で韓国を支持したフランスは、国を挙げてTGV（フランスの新幹線）の売り込みを行い断然優位に立っていました。そんな時期に韓国を訪れた私は、安博士の紹介により釜山市の副市長に面会する機会を得ました。私はまず一日本人として韓国に迷惑をお掛けしたことを詫び、その上で何か協力させて貰えないかと申しました。すると副市長は一瞬顔色を変えられた後、実はフランスに地下鉄の設計を委託しているが、軟弱地盤で困っているので手伝ってくれれば有難いということをおっしゃられました。私は早速専門家を派遣して協力いたしました。それがきっかけとなって、ソウルの地下鉄、後には釜山の地下鉄の最終段階に協力することが出来ました。昨年春、韓国の鉄道部長官が初めて訪日され、私は車中で単独で新幹線の説明をする機会を得ました。その折「日本に来て国鉄を民営、分割して良くなると至る所で聞かされるが、本当なのか？」と質問されました。私は左傾した組合をただすための分割、国会議員が口を出さなくするための民営が本当の狙いだと正直に申しましたら、それならよく分かった、韓国ではその必要は無いということでした。その後の日韓閣僚会議の席上で、「日仏公平に技術内容を検討する。日本の技術協力を是非仰ぎたい」という発言が鉄道部長官からありましたので、私は五年間協力した甲斐があったと思っています。

台湾を訪れて感激すること

戦前に台湾の鉄道の招きで、島内を視察した事がありました。南の四重溪という温泉から駅まで歩いた時の事です。総督府の役人が頼んでくれたのでしょう、台湾人の子供が私共の荷物を喜々として運んでくれま

した。別れるときにお礼のつもりでお金を渡そうとすると、どうしても受け取らないのです。聞けば学校の先生から「良い事をしてもお金は貰ってはいけない」と教えられているからと言うのです。

私は一年前の北京のホテルでの出来事を思い出します。北京の夏は暑く、部屋に西日が当たって夜熱気がこもって眠れないのです。ボーイに部屋を替えてくれと頼んでも、客が一杯だと言ってらちがあかないのです。数日後、気が付いてチップを握らせたとたんに陽の当たらない涼しい部屋に案内してくれました。

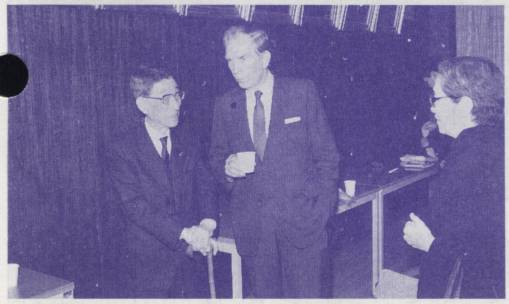
戦後に台湾を訪れて感激することは台湾の人々、わけても老人の方々が日本人に対して親切な事です。お年寄りの間では昔の小学校の日本人の先生の恩に報いるため、クラス会で台湾に招待することが流行しているという話しを、至る所で耳にしました。戦前の日本の教育者は台湾で立派な業績を残したのです。これに較べ、戦後の日本では教育者が、労働者として赤旗を振っているではありませんか。

日中国交回復となって日本の国鉄は台湾には公式協力が出来なくなり、中国に協力することになりました。私も十二年にわたって協力してきました。中国では共産党が日中戦争を巧みに利用して、革命に成功しました。共産主義はもともと自由を求め商売上手な中国人の国民性には合わないため、今や修正を余儀無くされています。国民は迎合していますが、政府を信用しているとは思えない節が見受けられます。中国の指導者が台湾の問題に触れられると急に神経質になるのは、蔣介石総統が、「以徳報怨」(徳をもってうらみに報いる)と言われて、終戦時に日本人に対してとられた寛容な態度が日本人の心を捉えている事実と、台湾の経済的繁栄に対する苛立ちの為と思われます。中国は徐々にではありますが変わってゆくことでしょう。

●台湾からはダニエル・リュー博士（中国文化大学教授、元国連大使）を初め５名が参加した

●往 来

ブックマン博士元主治医、ポール・キャンベルご夫妻来日、住友吉左衛門ご夫妻と再会



●故ブックマン博士の主治医を19年間にわたり務め又、側近の一人としても活躍されたポール・キャンベル博士と奥さんのアニエットさんが、昨年11月に20年振りに日本を訪れた。11月14日に憲政記念館で行われた二人の講演会には夫妻の古い友人である住友家当主、住友吉左衛門ご夫妻も出席され、自らスピーチを求めキャンベルさんご夫妻の人となりを語った。

本年の主な行事のご案内

■フィリピンMRA国際キャンペーン(マニラ)
1月10日～16日

■インドMRA国際会議(パンチガーニ)
1月19日～24日

■タイMRA国際交流キャンペーン(バンコク他)
1月21日～31日

■第8回通常総会及び講演会(キヤノン　賀来社長)
(於：憲政記念館)　2月27日(土) 午後2時～4時

■日米欧財界人円卓会議アメリカキャンペーン
(サンフランシスコ・シンシナチ・ニューヨーク) 4月17日～23日

■フランスMRA国際会議(ストラスブルグ)
5月16日～22日

■第12回 MRA国際会議(小田原・大阪・東京等)
「心の国際交流 パートII」　5月28日～6月7日

■スイスMRA世界大会(コー)
7月8日～8月28日

■韓国MRA世界大会(ソウル)
9月22日～29日

フィリピンの「道義革命」に国際的支援を

ダンテ・カルマ

スターズ・トラベル社社長（マニラ）

フィリピンが今もっとも必要とする援助とは

一九五三年（昭和二十八年）、日本政府はフィリピン人青年七名を親善使節として日本に招いた。学生代表としてその一員に選ばれた私にとって初めての来日の機会となった。これは巣鴨拘置所に拘置されていた日本人戦犯の釈放を認めたクリノ大統領の寛大な措置に対する感謝の印として企画されたものであった。マニラ出発を前にクリノ大統領は我々一行に対して、この訪日が「戦争の傷を癒すためのミッション」であることを強調した。実際、広島、長崎を含めた各地を回った私達は、敗戦国日本の惨状に心を痛めると共に、日本人の心のこもったもてなしに深く感動した。

その数年後、大学で学生組織の委員長をしていた私はMRAに会い、対立していた大学の学長との劇的な和解を体験した。

これら二つの出来事を体験した私には、後に娘がMRAを通じて旧敵国である日本に留学することになった際に全く反対する気持が起きなかったばかりか、やがて上智大学を卒業した彼女が結婚することになった日本人男性をも、喜んで義理の息子として受け入れ、現在フィリピンに住む彼を実の息子のように可愛がっている。彼らは外国から訪れるMRAのゲストにいつでも家を開放して温かく迎えている。

一昨年二月の「人民革命」以来、フィリピン国民は、二十年間にわたる独裁政権の抑圧のあとでの自由の風を満喫している。しかし、長年にわたって病んだ社会の復興には多くの努力、時間、そして決意が必要とされる。

先づ経済面だが、破産した国家経済を背負い込んでいるのがアキノ政権といって過言ではない。アキノ大統領が設けた特別委員会がマルコス前大統領の秘匿した財産のうち八十万ドルを差押えたがこれはほんの一部である。スイス最高裁はフィリピン政府がマルコスの秘密口座を検証することを認めたが、これらも合わせてマルコスが国外に持ち出した財産は五十億ドルとも百億ドルともいわれている。このツケが国民に回っている訳で、フィリピン政府は世界銀行に二百六十億ドルの債務を負っており、国家予算の四十%、つまり、輸出による収入の半分以上がこの債務の利払いに充てられている。

政治面では極右、極左、そして回教徒勢力による攻撃が、多くの島々から成るこの国をますます分極化させ、国民の心を動揺させている。

しかし、国の最大の問題は長年にわたる道義の崩壊にあり、社会の各層に巣喰った汚職の追放が全ての社会改革の前提である。昨年寄せ集めの人材でにわか作りの政府を率いざるをえなかったアキノ大統領は、この過程で不本意ながらも抱え込んだ官史の汚職に対する追求に強い指示を出しており、自らの一族にその手が及ぶことも辞さない構えでいる。

しかしこの道義の再建には、長年にわたって不正に対する感覚を麻痺させられてきた国民一人一人の意識改革が不可欠である。このフィリピンの将来を決する「道義革命」に専心するため、私は入国管理局副局長の職を辞した。この長く困難な闘いを成就させるために私は日本を初めとするアジア近隣諸国の助けをお借りしたい。

また、日比間に生じている様々な誤解の解消のために、日本の協力をお願いしたい。こうしたフィリピンの道義革命を助けるような援助こそが、最も望ましい日本からの援助となろう。

『国際化』とは何だろう？

徳永　誠
在日マレーシア大使館
広報担当官

去る十月二十四、二十五日の両日、小田原のアジアセンターに於て、第十一回MRA国際会議が開催され、私も四年振りに参加させていただきました。今回のメインテーマは、「心の国際交流」であり、分科会及び全体会議を通して、いろいろな角度から「国際交流」について深く考える機会が得られました。

「国際化」ということが声高に叫び始められて久しい現在ですが、一体この「国際化」とは何を意味するのでしょうか。そもそも、「国際化」なる言葉は英語には存在せず、日本語独特の言葉です。これは、日本及び日本人が置かれた特殊な立場、すなわち島国で、単一民族（もちろん、これには議論の余地がありますが…）によるところが大きいようです。私達にとっては、「日本」という国が、「日本人」から成り立っていることは自明の論理ですが、世界の多くの国では、民族、文化は多様で、それ故、言語、宗教、生活様式も異なっています。例えば、私が学生時代に留学していたオーストラリアについて言えば、世界百四十八ヶ国からの移民者及び太古の昔から住み続けている土着民族（アボリジニー）から成り立っています。また、私は現在マレーシア大使館に勤務していますが、この国もまた典型的な「多民族国家」であり、マレー人、中国人、インド人の主要民族を初め、その他の少数民族、計約七十の民族から構成されています。

日本では、「国際化」とは、特殊で、一見華やかで高級なものとして憧れ的イメージでとらえられているふしがありますが、世界の多くの国々に於て、それは日常的な現実であり、ややもすれば異民族、異宗教間の対立、紛争に発展しかねないという危険性をはらんだものです。それ故、これらの国々では、いかにして民族間の調和、統一を図っていくか、あるいは国民的なコンセンサスや独自のアイデンティティーをいかにして築いていくかということに頭を悩ませています。

二日間にわたって開かれた会議の分科会の席で、韓国の李恒寧先生は、「国際化について、政治、経済という国同士のレベルでは、大国（あるいは強者）が、小国（弱者）を支配、搾取する傾向にあることを指摘され、「心の国際化」とは、あくまで個人レベルの交流であり、民族、文化等の相違を超えた人間同士の対等な交流である」と述べられました。

また、今回の会議参加者では、最年長である韓国の黄温順先生は、その発言の中で「愛」がいかに大切であるか、繰返し強調されましたが、生涯を孤児院等での教育や社会事業に捧げられてきた方の発言であるだけに感銘するものがありました。

民族、文化の相違を超えた愛、あるいは相手に対する思いやりの気持の大切さは、いかに強調しても過ぎることはないでしょう。

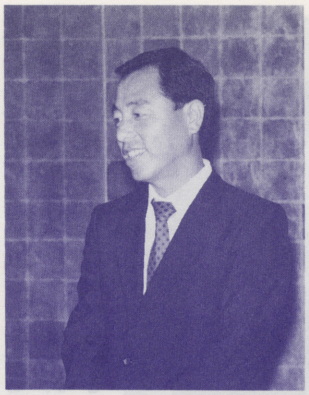
今回、私が属したC班の分科会には、韓国から数多くの方が参加されていたこともあって、日本と韓国との関係ということが議論の中心になりました。両国の過去の不幸な歴史及び現在の関係を改善していくためには、私達一人一人が、歴史を正しく学び、過去の過ちを二度と繰り返さないよう謙虚にかつ厳しく自分自身を見つめてゆきたいものです。この点において、李恒寧先生は、日本が韓国に対して行った植民地政策に関して「自分達韓国人にも責任はあった」と発言され、その謙虚さに参加者一同強く胸を打たれました。自分自身についてふり返って考えてみれば、人一倍、我が強く、ややもすれば傲慢で独善的になりがちな現在の私ですが、李恒寧先生に習って、謙虚な気持で、自分の心を他の人々に対して開いていきたいものです。

最後に、今回の会議に参加した韓国の一青年が「自分は以前、日本及び日本人に対してあまり良い印象を持っていなかったが、MRAに関わる日本人との交流を通して、日本という国が好きになった」と発言したのを聞いた私は、明るい将来が開けてくるような気がしました。「国際交流」も結局のところ、日常的な「隣人」との付き合いの延長上のものでしかなく、個人レベルの心と心の交流こそが、世界レベルの友好関係に発展していくことを改めて痛感させられた二日間の会議でした。

日タイ交流の懸け橋に

佐伯　憲

サハ・ファイブスター・コマーシャル社　（バンコク）



足かけ二十年、東南アジアで現地の人々と共に生活してきた自分にとって、最近の日本人の姿を現地の側から見てみると、色々考えさせられることが多い。

バンコクが現在ほど発展していなかった十年前、日本人の家に電話すると、大抵タイ語や英語で「ハロー！」という返事が返ってきた。バンコクの近代化が進んだ今、商社駐在員や日本政府機関関係者の九十％以上はプール付きのホテルのようなマンションに住んでいるが、そこに電話すると、「モシモシ」と日本語で応対する。タイ人から電話がかかってくることは絶対ないし、タイ人にも用事がないからだ。日本人社会のこのような現状に大きな疑問を持っている。

外国で暮らすことは子供たちにとって願ってもない国際交流の機会であるはずなのに、両親は日本に帰ってから困らぬように進路指導に重点を置いてくれと日本人学校の先生に言う。タイの子供との交流などもってのほかだとさえ言う。日本人がなぜこのような考え方をするのかと大きなショックを受けた。

タイはその経済の六十～七十％を日本に依存している。タイにとって日本が最大の援助国になっている。円高の影響もあり、日本企業によるタイへの投資も急激に増えている。このような時期に、街で日本人が常に群れをなし、日本人専用マンションから会社へ通う。日本語のできる秘書と日本語の書類を取り交わし、日系企業同士で商売を行う。夜は日本料理を食べ、日本のビデオを見て過ごす。東京都千代田区がバンコクにあるようなものだ。

今年は日タイ修交百周年ということで様々な行事が両国政府によって行われたが、一般のタイ人、日本人にとって何の意味も無い政府による政府のためのイベントであった。そこで私達はそういう思惑とは別に、日タイの子供同士による交流を考えた。日タイの子供たち百人ずつ、そして手伝いの日タイの青年百人、計三百人が集まって何かができるのではないかと思い、ルンピニ公園で合同キャンプを行った。キャンプを成功させるためには様々な問題があったが、最大の問題は日本人父兄にあった。現地人の子供と交流させるなどとんでもないと考える母親たちを長い時間を掛けて説得し承諾を得たが、その条件とは、タイの子供たちは公立学校のハイソサエティーの子供たちに限るというものだった。私達はタイで一番の学校の子供たちを集めたと母親たちには言ったが、実は無差別に子供たちを集めた。子供たちの好きなようにやらせてみると、彼らはとてもよく交流し、住所を交換しあい、次回の予定を尋ねるほどであった。子供たちには人種という意識があまりないということが実感できた。

タイの子供たちにあるがままの日本の姿を知って欲しいとの願いを持って仕事をしている。彼らの日本に対する誤解や甘え、或いは日本人がタイ人に対して持っている偏見などの解消に少しでも役立ちたい。

入会の御案内

社団法人国際ＭＲＡ日本協会は、家庭と社会の健全な発展と世界平和の実現に貢献する具体的な活動を行なっています。その事業の充実、発展を図るために左記の会員制度を設け、より多くの方々のご加入を呼びかけています。

(1)正会員　個人　年額　3、000円
　　法人　年額　50、000円

(2)賛助会員　個人　年額　1、000円以上
　　法人　年額　50、000円以上

郵便振替口座
東京八―三八二八九
口座名　社団法人
　　国際ＭＲＡ日本協会

会員の皆様には、①内外のＭＲＡ国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供　②機関紙ＩＭＡＪニュース等の送付　③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

- ●世界家族の仲間入り
- ●信頼できる人との出合い
- ●新時代に必要な情報
- ●心身の健康
- ●問題解決の秘訣

シン枢機卿キャンベラMRAハウスを訪問

――MRA運動を語る――

一昨年二月にフィリピンを激動させた「人民革命」、並びにその後の一連の民主化及び改革の精神的支柱となってきたシン枢機卿は、かねがねMRAと親密な交流を保ってこられたが、このたびオーストラリア滞在中の十一月二日に首都キャンベラのMRAハウスを訪問された。

ラオス・フィジィー・カンボジアを含む四十名から、歓迎の歌を含む温かな出迎えを受けた枢機卿は、終始気さくな笑みをたたえながら話をされた。以下はその抜粋である。

Andrew CAMPBELL(Canberra Times)

私達がそのメンバーとしてMRAにかかわる動機とは、永遠の魂と神の存在を信ずることに外なりません。どんなに立派に立ち居振る舞おうとしたところでそれが神への愛に基づいていないのであれば、全く意味を無さないでしょう。もしそれが人間に対する型通りの愛の問題であるのならば、それは自然なことです。しかし、もしそれが私達の神に対する愛によって動機付けられたものならば、それは超自然的なものになります。自然の愛は慈愛に変わり、たいへん価値のあるものになるのです。

司祭としての私が生涯を通して望むことは、調和と相互理解をより促進し、分裂の壁を打ち砕くことです。司祭という言葉の由来を語源学的に言えば、それはラテン語の橋を懸けるという意味の言葉が変化したものです。それは人間の心に橋を懸けることですが、無私の心が無ければ不可能なことなのです。もし私達が無私の心を持ったならば、この世界はより住みやすいものになるでしょう。人々は、枝から枝へと飛び移り仲間たちと歌う鳥のようになるでしょう。それが私の夢であり、美しい夢です。そしてそれはあなた方の夢でもあり、素晴らしい夢です。私達の夢が、空しい夢の失望に終わらぬことを願って止みません。

あなた方、MRAが目差しているゴールが素晴らしいものであることを私ははっきりと申し上げたい。あなた方は愛を何とか具現化しようとしていますが、神学で言われているように、その内面的存在である愛を外面的実在として捉えようとしても、内面の霊的交わりと反省無くしては達成できません。先ず内面からの出発無くしては、あなた方の目標を達成することはできません。心のなかに愛を持ちなさい。やがてその愛が世界を満たし、現実のものとして具現化されることでしょう。

救世主は私達を愛しますが、主は寄り添うように私達を招くだけで何事も強制することはありません。なぜなら責任というものは私達自身のものだからです。主があなたを創られたときでさえ、地獄に行きたいというあなたを天国に行かせることはできません。聖オーガスチンは言いました。〝あなたに相談無しにあなたを地上に創りたもうた神は、あなたの決意を聴かずにはあなたを救うこともできないのだ〟

主は招きます。神の祝福はあなた方、他の人々、そして私にも与えられます。しかしその祝福もあなたの協力が無くては役に立ちません。神の祝福にあなたが協力することによって、この世界をより住みやすいものに変えていけるのです。私はあなた方を応援したいと思います。意見や信念は必ずしも同じではないかも知れませんが、神の存在を信じると

いう基本的なつながりによって私達が結ばれているからです。

枢機卿は次に、まるで全てのことが神にかかっているかのごとき気持で神に祈ること、そしてまるで全てのことが自分にかかっているかのごとき気持で働くことの重要性を、次のように語った。

『祈りは人間の強さであり、神の弱さなのです。祈るほどにあなたは強くなり神は弱くなります。主は祈る人を受け入れざるをえません。祈ることはとても重要なことです。祈ることをしない人間とは、翼の無い鳥であり、神のもとへ飛んでいくことはできません。油の切れたランプであり、明かりを灯すことはできません。丸腰の兵士であり、悪の勢力と戦うことはできません。バラが植えられていない庭であり、美しさに欠けます。だから私達は祈るのです。祈りとは一体何なのでしょうか。それは神の声を聴くということです。神に何事も伝える必要はありません。神はあなたの考えや必要としているものを知っています。神の声に耳を傾けなさい。詩篇にも「僕聴く、主よ語りたまえ」とあるではないですか』。

第十回MRA関西秋季大会開催

第十回MRA関西秋季大会が、去る十月三日から四日まで、神戸の住吉研修所で開かれました。今回は「自分のあり方が国のあり方」というテーマで、関西のみならず、九州、関東からも合わせて八十四名をお迎えしました。関西MRA世話人会の沖田さんのほのぼのとした司会で、今回の大会も家庭的な雰囲気でスタートしました。分科会も含め活発な意見の交換がなされましたが、その中から今回初めて参加された西日本銀行の溝田順子さんのお話をご紹介します。

『昨日から今日までの自分の心の中の動きについてお話したいと思います。私はこれまでMRAのことは全く知りませんでしたが、上司から勧められて参加いたしました。特に積極的な気持があって参加した訳ではなかったのです。初日の全体会議に出て、そこに書いてあった「四つの絶対標準」という言葉を見て、ここにいる人たちは全員偽善者の集りではないか、日常生活の中でこういう気持になれるのは神様、仏様しかいないのではないのかと思いました。馬鹿げたことを言っていると思いました。又、誰かがご立派なスピーチをして、それに対してみんなが大げさな拍手をするのを見て、何か別世界に迷い込んだような違和感と戸惑いを覚えました。

◇◇

ところが、夜の分科会のときでした。自分よりずっと若い高校生たちの信念に溢れた的確なお話を伺って、「自分は悪いことこそしていないにせよ、漫然と生きているだけではないのか。『あなたはどんな人ですか?』と他人に聞かれた時に、果たして自分というものをあの高校生たちのように的確に表現できるだろうか」と考えさせられました。

固かった私の心が徐々に変わっていきました。「四つの絶対」にしても、神様や仏様のことではなく、よく考えてみれば自分自身の中にもあるんだと気付いたときに気持がとても軽くなりました。

ここにいる人たちも決して特別な人なのではなく、忙しい仕事の合間を縫って、何か共感し合えるものをここに探そうとして参加している人たちなのでした。

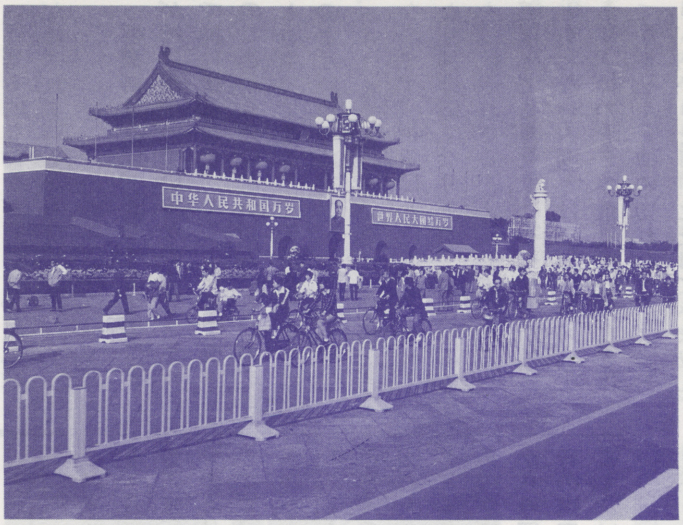
◇◇

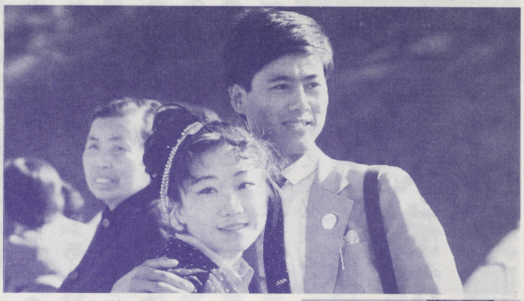
私は心の色眼鏡を外すことができました。言葉にすれば硬くなりますが、私自身、正直、純潔、無私、愛といったことを基準に生きてきたのだし、大上段に振りかぶらなくとも日々の生活の中でちょっと気を付けてみれば自分の中に発見できることなのです。

今朝、多くの方々が「昨晩はよく眠れましたか?」と、身も知らぬ自分に声を掛けて下さったことにとても感動しました。これがMRAなんだなと思いました。

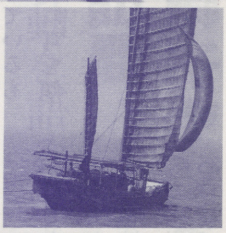
最近、両親や兄弟に「ありがとう」、「すみません」、「ごめんなさい」と、やっと素直に言えるようになったのですが、そんなときにMRAに出会えたことでその仕上げができた気がして清々しい気持です』。

本年度のMRA関西秋季大会は十月末に開催を予定しています。ご参加をお待ちしています。





★有縁千里来相会
縁さえあれば千里も遠く離れていても再会できるという意味の中国の諺



有縁千里来相会

北京・南京・無錫・上海を訪れて

寒河江 亮

はじめに

去る九月二十九日より十月六日まで、日中国交回復十五周年記念友好訪中団の一員として、初めて中国を訪れる機会を得ました。

私は今回の旅に、私がこれまで書籍やマスコミ等から得てきた中国に関する断片的なイメージ（多くの場合、ネガティブなものでした）や、歴史への無知から生じる偏見や蔑視的な見方を可能な限り払拭し、心を白紙のキャンパスにして私自身の中国を描いてこようという決心をして臨みました。身構えてばかりいたのでは心が曇ったかもしれないし、気楽さだけでは無責任な旅になってしまったことでしょう。この旅が私にとって生涯忘れがたい旅となり、単なる観光旅行では決して出来ない貴重な体験をさせて頂けたのも、今回副団長を務められ、MRAからの派遣にご尽力いただいた榊たか子先生はじめ、日中双方の関係者の方々のご配慮があればこそと心より感謝申し上げます。

私達総勢八十六名は五つの班に分かれました。私の第三班は男性七名と女性十三名から成り、平均年齢は五十三・六才とやや高かったのですが、気持のとても若い方々が揃っているようにお見受けしました。お陰様で三班は中国側の通訳の方々も含めて全員の心が一つにまとまって、素晴らしい旅行が出来たと思います。健康上のトラブルや、団体旅行にありがちという人間関係上のトラブルも一切無く、まるで家族で旅行しているかのような安らぎすら覚えました。帰国後、私達三班がこれからも末長くお付合できるよう「太好了！良かった会」という親睦会を全員の総意で結成したことからも、どれほどこの旅が私達の心に残るものであったかが分かって頂けることと思います。移動中のバスの中は、日中親善歌合戦の会場と化し、元ポリドールレコード専属歌手（？）を筆頭に自称玄人はだしの揃った我が三班は、寸暇を惜しんで日中友好に励みました。中国人の好む日本の歌は、「四季の唄」、「北国の春」、「母さんの唄」などであり、良い歌には国境が無いということがよく分かりました。又、筆談、ジェスチャー、片言の英語、その他あらゆる手段を用いての中国語修得も熱心に行われました。その結果、各地で怪しい中国語が飛び交うこととなり、中国人民を随分と戸惑わせたことでしょう。

出会いと発見の旅

今回の旅を一言で表現するならば、それは出会いと発見の旅だったと思うのです。言うまでもなく、中国各地方の郷土色豊かな名菜は私の舌を驚かせ、万里の長城、故宮、明の十三陵などの巨大史跡群は私を圧倒しました。しかし、もし中国の人々との出会いと交流、そして驚くべき大胆さで変革を遂げつつある中国社会主義建設の姿を目の当たりにすることが無かったならば、私の印象は随分と違ったものになっていたことでしょう。ある席で、中国政府関係者は中国の進める改革・解放路線をこう喩えました。「新鮮な空気を採り入れるために窓を開ければ、蚊や蝿が一緒に入ってくるのは仕方が無い」。中国も随分と変わったものだと誰かが呟いたのを覚えています。

さらにその政府関係者は、中国の社会主義建設はその初期段階にあると定義し、それは二十一世紀半ばまで続くと述べました。その最重点課題である現代化発展促進に改革路線は不可欠であり、ヨーロッパの資本主義の立場から成立したソ連型社会主義と、昔の封建主義の立場から成立した中国型社会主義とは違うものであり、中国は独自の路線を歩むと言い切りました。特に興味深く聞いたのは、既に現実の政治が先行しているとは言え、中国の外交政策の一つとして、社会制度の違いを超えた自由主義諸国との平和共存関係の樹立を挙げ、他の社会主義国家との衝突の可能性もあるという説明でした。

先頃行われた中国共産党第十三回党大会で、その理論的裏付けを獲得した現実重視の経済・政治改革が、多少左右にふれることはあっても、今後より大胆に進められることはまず間違い無いでしょう。中国はもはや後戻りは出来ないと私は感じました。人的交流の拡大と共に情報の流れも太くなるものです。この流れは誰にも止められないでしょう。十億余の人口と五十四の少数民族を抱える多民族国家中国の舵取りは容易なことではないが、たとえ社会主義であれ資本主義であれ、この広大な大地と多種多様な人々を、とにかく一つの国家としてまとめあげてきた中国指導者たちの叡智を私は信じたいと思います。台湾の記者の中国取材や外省人の大陸里帰りを台湾当局が解禁したことなどにより、新たな局面入りを感じさせる中台関係の十年後、二十年後の展開も、これらの動きと無縁とは思えません。

有縁千里来相会

「どうも貴方のお名前を昔聞いたような気がします」と、私達のテーブルの向い側に座っていた中華全国婦女連合会国際連絡部副所長の白易蘭女史が完ぺきな日本語で私に声を掛けられました。中国二日目の夜、人民大会堂で行われた中国国際交流協会による歓迎レセプションの席のことです。

私はバックの奥にしまっていた古惚けた一葉の写真を白女史に手渡しました。その写真とは、日中間にまだ国交の無かった昭和三十一年九月から十一月まで日本青年団協議会訪中団団長として中国に招かれた若き日の父（善秋）が、北京飯店の歓迎レセプションの席で周恩来首相と乾杯しているものでした。暫くその写真を眺めていた白女史の次の一言は私を驚かせました。「貴方のお父さんが中国に来られた時の話を何回か私も聞いています。今、写真を拝見してはっきりと思い出しました」。

さらに「当時の関係者の一人がここに来ています。私が紹介しますからついてきて下さい」とわざわざ

●北京に400万台以上ある自転車にはライトが付いていない。一斉にライトを点灯したら明る過ぎて逆に危険という説明に納得。（北京天安門広場前）

●中国では一人っ子を6人の親が可愛がる……？答は両親＋双方の祖父母＝6人。（南京）

席を立たれ、メインテーブルに座っていた黒いスーツに身を固めた紳士に私を引き合わせて下さった。快く応じて下さったその男性は、白女史の説明を黙って聞かれながら、何度もうなずかれました。

何年か前に中国が日本の青年や日中交流に貢献のあった人々を多数中国に招いた際、当時既に父が亡くなってから十年近く過ぎていたにもかかわらず、母が招待され、健康上の理由により辞退すると、今度は長兄を日青協歴代会長の班に招き、手厚くもてなしてくれたことにどれほど感激したかを私が伝えると、その男性、つまり中国共産党中央委員会外交連絡部部長朱良先生は、「中国人は水を飲むとき、井戸を最初に掘った人々のことをいつまでも忘れません。今度は貴方が父上の跡を継いで中日友好に尽くされることを期待しています」。こう言って私に力強い握手を求められた。当時中国を旅していた父は、まさか三十一年後に自分の写真を携えた息子が北京を訪れ、同じ人達に出会うことになるとは想像もつかなかったことでしょう。単なる偶然と片づけるには、余りにも不思議な出会いでした。「有縁千里来相会」とは正にこういうことを言うのでしょう。

許しても忘れることはできない

「私達中国人が過去を忘れないのは、新たな憎しみや恨みを呼び起こすためではなく、過去から学んだ教訓を将来の友好に活かす為なのです。近年日本では過去の歴史や事実に対する認識の薄れがありませんか？」。

第一日目に宿舎の万寿賓館講堂で行われた講演で、中国共産党中央委員会対外連絡部顧問張香山先生が言われたこの言葉を、私は今回の旅行中ずっと考えていました。そして日本に帰った現在もなお、考えつづけています。訪れた先々で、この「過去への認識」という問題は、台湾に関係した事柄、例えば光華寮問題や蔣介石顕彰会などと共に必ずといっていい程、中国側の挨拶のなかに盛り込まれました。教科書検定問題やA級戦犯を祭っている靖国神社への閣僚公式参拝の問題などに対する中国側の苛立ちが感じられました。私は日本の国民は軍国主義の過ちを再び許すほど愚かではないと信じていますが、日本で常々感じていた「なぜ中国や韓国、そして近隣アジア諸国の人々は日本国内の動き、出来事に過剰とも思えるほど敏感に反応するのか？」という疑問に対する答えを中国に来て肌で感じる思いでした。足を踏んだ側はそのことをすぐに忘れがちですが、踏まれた側はその痛みをなかなか忘れられないといいます。戦争の痕跡はアジアのほうぼうにまだ生々しく残っています。もう戦後は終わった。過去は忘れようというのであれば、中国残留孤児の方々の心の痛みは決して理解出来ないでしょう。今日の日本の繁栄は過去の累々たる屍の上に築かれたものです。その事を忘れ一時の経済的な力に驕り昂ぶり、マネーゲームや土地転がしに狂奔するこの社会を見て果たして英霊たちは喜ぶのでしょうか。

過去は許すことは出来ても忘れることは出来ないと中国人は言います。だから彼等は私達が訪れた蘆溝橋抗日戦争記念館や南京大虐殺記念館などを作り、日本人として直視しがたい写真や映画、旧日本軍の武器などを展示し、世代から世代へと繰返し繰返し過去の過ちを伝えているのでしょう。

二度とこのような悲劇が繰り返されぬよう、次の世代に歴史的事実を判り易く引き継ぐ記念館のようなものに、私は残念ながら日本で行ったことがありません。過去への反省を他国でなく自分の国でできるのならそれに越したことは無いと思いました。

●30万人と言われる犠牲者の数が記された石碑の前で声もなく…。（南京大虐殺記念館）

中国国際交流協会副会長朱学範先生が、人民大会堂での挨拶の中で述べられた、「友好であれば両方共に利有り、仲悪くなれば両方共に損なり」という言葉が忘れられません。

私達の世代が引きつぐもの

さて、八十六名という大訪中団にもかかわらず、北京到着時から上海出発まで誠心誠意、親身のお世話を頂いた中国国際交流協会の役員、そして通訳の方々のご苦労を忘れるわけにはいきません。私は旅行中、努めて中国の方々と行動を共にしました。社会体制や立場の違いをわきまえ、お互いに自制した事柄もあった

でしょうが、それでも様々な問題について卒直な意見を聞かせて貰えました。団体行動上の制約、或いは言葉の障害もあり、路上で一般市民に話かけるわけにはいかなかったし、国際交流協会の人達は或る意味において特別な立場の人達であることを割り引いても私は満足しています。中国の諺で「喧嘩をしてこそ本当の友人になれる」といいます。私は幸いにも喧嘩をすること無く沢山の友人を得ることが出来ました。

私達は天安門広場を歩きながら、或いは移動中のバスや汽車の車中で、様々なことを語り合いました。終始笑みを絶やさず、私達を古くからの友人のように扱ってくれる人々の心の奥底を窺うことは容易なことではありません。しかし、心を開いて話しをすれば、相手も心を開いてくれることに中国も日本も違いは無いのです。

私の世代は勿論戦後生まれですから、直接の戦争体験を持っていませんが、両親の世代は戦争を直接体験しています。だから、親から子へと過去の体験は語り継がれ、その愚かさを反省し、二度と繰り返してはならないという決意を持てる可能性はあります。だが、次の世代となると話は随分違ってきます。彼等は戦争を知らない世代を親に持ち、過去への認識が薄れるどころか、その認識すら存在するかどうか疑わしいものです。加えて、現在の受験至上主義の下では近代史における日本とアジア諸国との関係という図が極めて捉えにくくなってはいないでしょうか。それは大変に危険なことだと思うのです。なぜならば、「新しい関係」を築くために越えなければならないハードルがまだ幾つか残っていると考えるからです。無理解は偏見を生み出し、偏見は傲慢さにつながります。「日本人の顔は西欧を向いている」とはよく云われることですが、隣人から尊敬されること無く、独りアジアの盟主を気取っていては「裸の王様」となる日も遠くないことでしょう。

又、GNP、経済成長率などの経済的尺度で計るならば、確かに日本は中国や他のアジア諸国より進んでいるでしょう。日本は中国にとって最大の援助国であり、中国のODA受取も八十二年以来首位の座を占めています。しかし、だからと言って日本が本当に豊かであるとはどうしても思えないのです。日本が戦後、物質的繁栄と引替に失ったものは余りにも大きかったと思います。その上、「日本ではあってもなくてもよいものは確かに豊富だが、本当に必要な物に手が届かない」と[illegible]するアジアの友人は少なくありません。留学生や難民にとって日本はまだまだ住みにくい社会です。

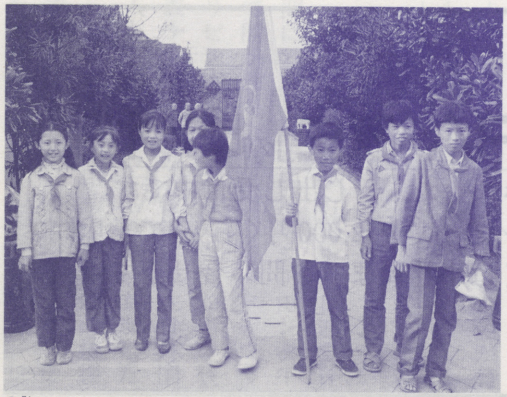
ともあれ、国際化のかけ声やら、円高による日本人の海外渡航熱の高まりとは裏腹に大切な事が再び忘れ去られつつある気がしてなりません。現在でこそ日本はDAC（開発援助委員会、OECDの三大委員会の一つ）諸国中第二位の援助国ですが、歴史を振り返れば、戦後の復興期には米国のガリオア・エロア協定に基づく占領地域復興援助を受け、一九五三年から六十六年まで世界銀行の融資を受け入れる被援助国でした。又、ララ物資、つまりアメリカの公認のアジア救済団体から送られた食料や衣類は、約千五百万人の日本人の生活をうるおしたといいます。栄養失調に直面する日本人にとって、ララ物資は力強い支えとなりました。歴史と言ってもまだ半世紀もたっていないのです。自らの痛みを知ることなくして他人の痛みを感じることは出来ません。このような体験を風化させないのは私達の世代の義務かもしれません。

私は国際交流協会の人達と話しをしながら、久しぶりにこんな事を考えさせられました。

おわりに

私達は到着時に、「中国には多くの進歩もあったが、立ち遅れているところも少なくありません。良い面もあれば悪い面もあります。両方とも良く見て、素直な意見を聞かせて下さい」ということを言われました。確かにその通りであると感じました。旅行中、様々な不備を目にした事も事実ですし、私にはどうしても信じられなかった説明もありました。しかし私にはその答えを焦って求める気はありません。なぜなら、私の中国の旅は今始まったばかりなのですから。再見！

（社団法人国際MRA日本協会職員）



●胸のリボンは出来る子のしるし、21世紀の中国を担うのはこの子たちだ。中国語が何とか通じて〝はいポーズ！〟（無錫）

写真で見る MRAの歴史――No.5

鳩山首相、MRA音楽劇「消えゆく島」を観劇

〈昭和三〇年〉

昭和三十年六月、MRA音楽劇「消え行く島」("The Vanishing Island")が、日本を振り出しに台湾、フィリピン、タイ、ビルマ、イラン、ケニア等で公演された。日本では東劇で上演された。星島二郎衆議院議員は、鳩山首相の指示でこの劇と共に各国を訪問した。写真は「消え行く島」を観劇する鳩山首相ご一家。

事務局近況

●新年明けましておめでとうございます。本年はMRA発足五十周年という記念すべき年となります。IMAJニュースも一層充実させるべく頑張りますので、旧年同様、宜しくお願い致します。

さて、オーストラリアでのスタディーコース受講を皮切りにMRA研修生として三年近く海外で活躍してきた杉裕雄君（二十三才）が先日無事帰国しました。今後は事務局の新戦力としてその貴重な体験をフルに活かしてもらえることになりました。宜しく御指導のほどお願い致します。

バザーのご報告とお礼

婦人会有志手作りのクリスマス小物が彩りを添えて、今回も賑やかなバザーになりました。今回の売り上げは22万9千55円で、純益の19万210円は、昨年のMRA国際会議に海外より参加された方々の滞在費の一部にあてさせて頂きました。ご協力下さいました皆様にお礼かたがたご報告申し上げます。有難うございました。四月上旬に予定しています次回のバザーにも、皆様方の一層のご協力をお願い申し上げます。

「MRAの歴史」のビデオ（ベータ VHS）

ができました。貸し出し受付中です。
ダビングも実費（2,000円くらい）で承ります。
詳しくは事務局までお問い合せ下さい。